

慈濟

ものがたり

ツーチー 2020年10月 286



あの年に 拍手した手



写真の手の持ち主である黄梅（ホアン・メイ）さんは、1990年8月23日に台中市の新民高級商工職業学校（現・新民高級中学校）で行われた社会公益講演会に参加し、客席に座っていた。講演の最後に、證嚴法師は来場者に向かって「拍手したその手で環境保全をしましょう」と環境汚染を減らすことを呼びかけた。

法師の呼びかけを聞いて、黄さんはリサイクル活動に参加し、地域で資源回収を実行しようと決心した。30年来、様々な困難があったが、途切れることなく信念を貫き通し、あの時に拍手した手で法師の心願を実践してきた。黄さんのように慈済リサイクルボランティアとなった一介の小市民は、今や世界中で11万人余りを数える。皆で大地を護る使命を担っている。



●扉の言葉・撮影・黄筱哲 訳・済運



慈済は環境保全を推進して30年になる。表紙を飾る荒れてタコができた手は、30年前に講演会で拍手をしてから今日まで、リサイクル活動を続けてきた。同じように数えきれないほどの慈済リサイクルボランティアの手が、変わらない決意で、無量の宝物を回収している。(表紙デザイン・黄筱哲)



慈済日本サイト

目次

【特集 環境保全三十】

(上)

一念の心と両手で回収する無量の宝	慈願／訳	4
静思精舎 物を大切にする日々	慈願／訳	6
環境保全を牽引する民間の力	有田夏子／訳	22
三十年続くとは思ってもせず	高雪白／訳	46
賛同し、感想を分かち合い、皆を誘って始めよう	御山凜／訳	50

リサイクルがいつまでも終わらないのはなぜ？	御山凜／訳	54
-----------------------	-------	----

【簡素な生活】

捨てる水はない 生活の知恵	心嫫／訳	56
---------------	------	----

【證嚴法師のお諭し】

医療の愛は忘れてはいけません	慈願／訳	64
----------------	------	----

【行脚の軌跡】

人生の引き継ぎ	済運／訳	70
---------	------	----

【特別報道 エリア共有】

農作物と共に成長するコミュニティ 食べることは生きること	有田夏子／訳	76
---------------------------------	--------	----

九月の出来事	済運／訳	107
--------	------	-----



一念の心と両手で



回収する無量の宝

皆人が両手を差し出せば、何百、何千、何万もの手となり、共に大地を浄め、気候を正常に戻し、災害を減らしていくでしょう。

環境問題を解決する最も良い方法は口で言うのではなく、手を動かし、足を踏み出すことです。台湾には八万人以上の慈済環境保全ボランティアが、日々、頭を垂れて「宝」を拾っています。彼らは資源回収再利用の奇跡を記し、そして国際舞台に立って地球を護る簡単な方法を世の人に示しています。

静思精舎 物を大切にすする日々

「この一枚の紙、この一滴の水に私はとても感謝しています。感謝しているからこそ、愛おしみ、大切にし、そして節約しようと思うようになるのです」。法師のこの教えを守り、奉仕しながら、静思精舎の尼僧たちは半世紀、福を惜しむ日々を送ってきました。

文・釋徳澡 撮影・黄筱哲 訳・慈願

禅

の修行として農業を営む自給自足の生活は、今でも静思精舎での修行の基礎となっており、また尼僧たちは經典にある教えを日々実践しているので。證嚴法師は、道理はただ理解するだけでは何の役にも立たず、理解した上で行動に移すよう教えています。行動は最

も着実な道理なのです。生活の中で物を大切にしなければ、直ぐに壊れてしまうようなもので、「感情を持たない物であっても、それを惜しんで大切に言えば、道理に通じるのです」と法師は言いました。

二万日余りの日々の中で、静思精舎の尼僧たちは毎日環境保全を心がけ、己に

打ち勝ち、勤勉に儉約して困難を克服し、同じように実践しているのです。

一枚の紙、一滴の水にも命が宿る

初期の精舎は全てで困難な状況にあり、法師は皆にどんな物でも最後まで使い切り、ごみを減らすと共に支出を減らして、物がその役目を完全に果たすよう教えました。それによって勤勉儉約の美德を身につけさせました。

「一枚の紙を一度使っただけで捨てるのはもったいないことです」。法師はかつて、紙にその生命の効能を十分に発揮

させなければならぬと言ったことがあります。普通の人は紙を一度使ったら、直ぐに捨てるかもしれませんが、法師は四回以上使います。一回目は鉛筆、二回目は青色のボールペン、三回目は赤色のボールペン、四回目に毛筆で書くのです。また、法師が使うメモ用紙は浄財の領収書から裁断された紙の端の部分で、その豆手帳も同じように何度も書いて、最後まで使い切っていました。「紙の切れ端を捨てるのはもったいないことです。やはり拾って使います」。

「水は生命の源ですから大切にしなければなりません」。水を使うのも、法師

は一滴たりとも浪費しません。「朝、顔を洗った後の洗面器の水は、その日一日分の手洗い用の水として使います。そして、夜、体を清めた後の水は翌日の朝にトイレを流す水に使います」。法師は、「使える物なら何でも浪費してはいけません。皆さんが心から理解して実践し、生活の中の些細なことでも徹底して欲しいと思います。それが一滴の水であっても、です」と言いました。

「私は水を使うのが惜しいのです。雨水でさえも流れるままにしておけません」。法師は繰り返し言うています、「この世の資源は節約して大切に使わなければ

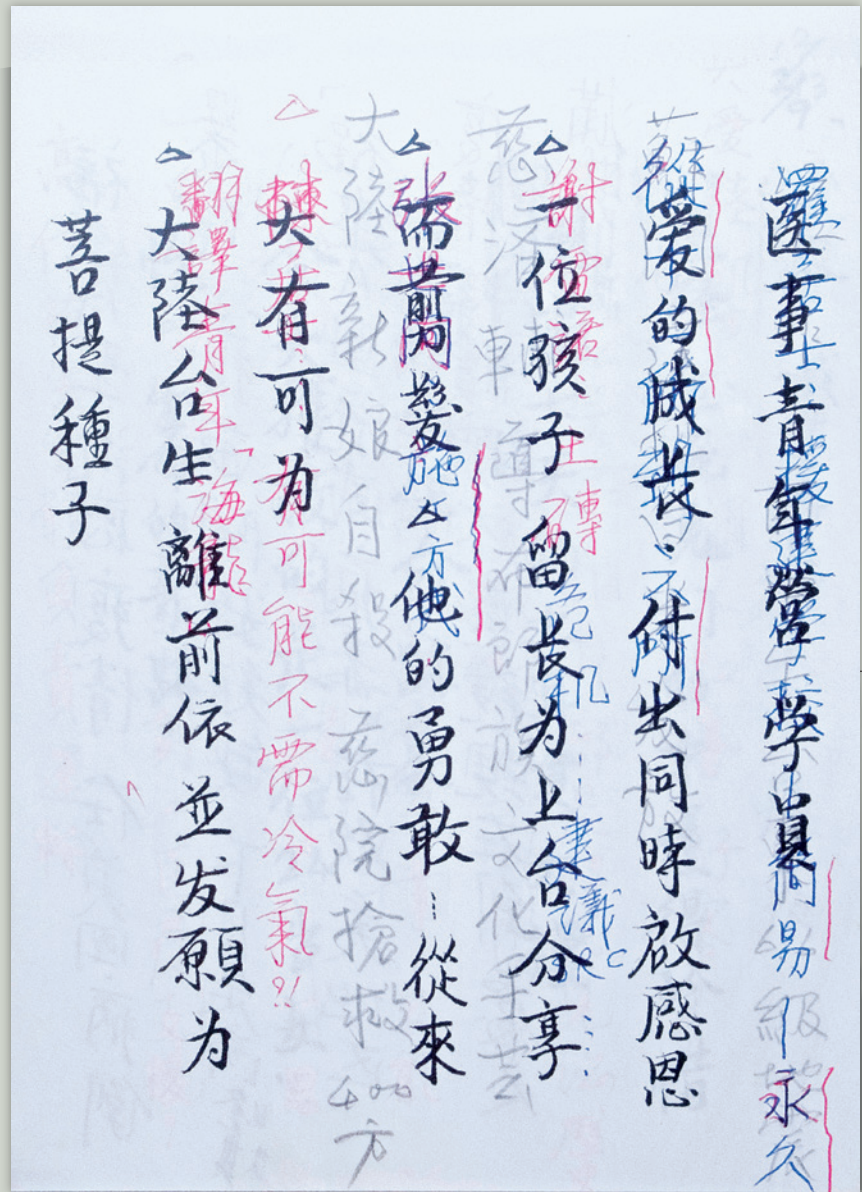
なりません」。そこで「慈誠楼（ビル）」の地下室には雨水用の貯水池が造られ、トイレの水洗や植木の水やりなどに使われています。

法師の節電方法は、普段、書斎は暗いのですが、「私は本を読む時、机の上に乗上用省エネランプがあるだけです」。半世紀の間、法師は日々このような生活をしてきました。

法師の明言した「物の命を殺す」とい

早期において法師が朝会で開示した要点。一枚の紙に先ず鉛筆で書き、次に青色、そして赤色のボールペン、最後に毛筆で書いている。

(写真の提供・静思精舎)





う言葉を聞いて、私は震撼しました。無意識のうちの浪費が生活の中で多くの物の命を奪っているのです。

「使っていない電灯をどうして消さないのでしょうか？」これは法師がいつも皆に注意する言葉です。修行とは全てを大切にすることであり、電灯を消し、蛇口から水を流しっぱなしにしてはいけません。「電気と水資源を浪費することは抹殺であり、物の命を殺していることと

法師は、浄財の領収書の端を裁断して作ったメモ用紙にボランティアの感想や経験談を書き留めている。それも繰り返し使うのである。

同じです」。

今の人たちは流行に追いつこうと、携帯を一つまた一つ取り替え、物を買ひ換えます。行き過ぎた消費は物の命を殺していることに他なりません。法師は「皆の手にある携帯は、良いことを発信していないのであれば、それは即ち煩惱であり、全て自分の道心を乱しているのです。それは物の命を殺しているだけでなく、人の慧命をも殺しているのです」と重々しく言いました。

「この一枚の紙、この一滴の水に私はとても感謝しています。感謝しているか

らこそ、愛おしみ、大切にし、そして節約しようと思うようになるのです」。法師は紙、水、電気などあらゆる物を節約し、福を知り、拾い、惜み、更に造り出しています。これまでの道のりにおいて、いつも身を以て示し、生活を整えてそれを広め、寛容に間違いを指摘し、周りの人に感動を与えてきました。

まだ使えるうちは、
絶対に新しい物を買わない

静思家風は脈々と受け継がれていま

す。法師の法を弟子たちはしっかりと受け止め、水を貴重なものとして扱っています。洗濯の時は衣服をもみ洗いしてから乾かし、手洗いの水も貯めてトイレの水洗に使っています。

精舎の厨房では、野菜を洗うのに水を張った五つの大きな流し台で次々に洗い、最後に綺麗な水を加えながら濯ぎます。使った後の水は工具の洗浄や床掃除、菜園の灌漑に使います。米を洗った後の水は菜園に使うだけでなく、厨房の食器や調理器具洗いに欠かせません。

省エネの達人と言われる尼僧たちは、黙々と至る所で使わない電灯を消し、他

人に代わって実践しています。「ここは我が家ですから、家族の一員として家のためを思うのは当たり前です」。

「法師の教えは優れた素晴らしいことばかりです」と深く信じているのは精舎の総務を預かる徳佳（ドーチュエン）尼です。総務を担当してからは、ここにある物全てを慈しむと言う原則を守り、「まだ使えるうちは絶対新しい物を買わない」こととしており、壊れても修理に修理を重ね、限りある原材料を再加工して、使える資源に変えています。

「自分の眼球を護るのと同じように、常に物を大切にしましょう」。徳佳尼は

アイデアで、廃品を芸術品に変えています。壊れた扇風機は鉄製の保護カバーを服や雑巾を干す円形の物干しに変えています。回収した鉄製の棚はゴム紐を取り付けて洗濯籠などを置く棚にしており、環境の美観にもこだわっているのです。ディスプレイボトルも見逃しません。徳佳師父にとっては宝物に見え、改造されて大容量洗剤容器に取り付けられました。使いやすくて実用的です。

以前、男性ボランティアの宿舎の枕を全部新しい物に取り替えた時、徳佳尼は一週間かけて枕を縫い合わせて大きなマットレスに仕上げ、人々に好まれてい

ます。限りある資源の中で絶えず智慧をしばる、徳佳尼は、「尼僧たちのために、頭を使い続けなければなりません」と言いました。諸々の智慧による発明は精舎と言う大世帯のために出費を押さえるだけでなく、物の命を永らえることを一番に考えているのです。

清浄は源から 精舎が先頭に立つ

香積飯（即席飯）と穀物パウダーの製造は、精舎の自力更生の一環です。では製造に使われた米の袋や大型ビニール袋は何処へ行くのでしょうか？



尼僧たちはそれらを再利用する以外に、アイデアで米袋を様々な形の手提げバッグに縫い上げ、表に「静言語」を書いたので、「法のあるバッグ」となり大好評をえています。台湾からアフリカに配付された白米の袋は、現地ボランティアが尼僧を見習い、「[LOVE FROM TAIWAN]」の文字をいかして加工し、現地職業訓練所で人気のある工芸品に変わりました。

回収した大形ビニール袋が軽くて便利な防水着に改良された。昼食後、精舎の調理当番の尼僧たちと清修士は防水エプロンを着けて食器洗いに取り掛かった。

野菜や食器洗いの時に着ける防水エプロンも、尼僧たちが大型ビニール袋を裁断して作ったもので、ボランティアたちも尼僧たちは物を惜しみ、環境にも優しいと絶賛しました、「私たちもその素晴らしいアイデアに学びます」。

「町で売っている使い捨ての防水エプロンは一枚十元です」が、儉約家の尼僧たちは、「回収したものを改造して利用すれば、一元もかかりません」と言いました。精舎では毎日、朝食と昼食でそれぞれ数百人分の食事を用意します。食材を使った後の包装紙や大小のビニール袋

はゴミになるのではなく、洗って乾かし、再利用しているのです。

法を深く研究するだけでなく、重要なのは実践です。徳渙（ドーホワン）尼は精舎でビニール袋の整理を始めた人ですが、「法師が『清浄は源から』を呼びかけていたため、コミュニティではよく実行していました。精舎は慈済の源ですから、先頭に立ってしなければいけません」と言いました。その信念によって、務め以外の時間を利用して、「できる限り整理しよう。時間は自分が作るもので、少しでも多くやれば、それだけ地

球は清浄になるのだから」と考えて行動しました。

濡れたものや油があるビニール袋は洗って乾かしますが、手間のかかる作業です。徳渙尼が先頭に立って始めましたが、今は専任の担当責任者がいます。母なる地球の健康を悪化させないために、この作業を受け持った徳渥尼は初心を忘れていません。「余計な事は考えず、やるべきことをやればいいのです」。

精舎で整理されたビニール袋は清潔で細かく分類されているため、直接、工場に持ち込んで再生されている、と運送担

当の宜蘭のリサイクルボランティアが言いました。

勤勉と儉約は修行者の本分

精舎は天下一の大家族であり、乾燥野菜類は保存食として欠かせません。保存用の乾燥キャベツやカリフラワーなどを入れる袋も回収した米袋やビニール袋が使われています。

二〇二〇年は新型コロナウイルスの影響で、二月から三月にかけて、農産物が輸出できなかったため、精舎はトラッ

クで一台また一台と農民からカリフラワー、キャベツ、クズイモ等を買取り、処理してから乾燥させました。保存用の食糧は十分だったのですが、法師の指示で続けて作りました。「晴れた日に雨の時の備え」をして非常時に備える一方、必要とする人に配付し、また苦勞して野菜を育てた農民に元手が残るよう配慮したのです。

乾燥野菜は弱火で乾燥させます。薪を燃やしても黒煙を出さないようにした改良した旧式の乾燥機を使います。燃料は港で要らなくなったパレットを使ってい

ます。慈濟ボランティアが精舎に運び、木材を切って乾燥機に入れます。

早期の精舎では、一食にありつけても、次の一食がどこにあるのかわかりませんでした。一本の大根があれば、それは大変なご馳走で、皮から葉っぱまで食べ、余すところなく使いました。おかずは大豆食品を買う以外、手に入る物なら何でも煮込んだため、乾燥野菜は毎日、欠かせない食材でした。全てが不足していたため、儉約し、物を大切にすれば良い習慣が身についた、と徳如（ドール）尼が言いました。「これが静思家風であり、



修行者の本分でもあるのです」。

以前は煮物といってもシイタケやベジタリアン食材もなく、味付けは醤油だけで、乾燥野菜の煮物も皆、美味しいと言ってくれた、と接客担当の徳安（ドアン）尼が語りました。「至る所で節約して支出を抑えるのが私たちのやるべき事です」。善用し、物の命を惜しみ、再び生命を吹き込む。精舎に生ゴミが出ないのはこうした理由からです。

普通の人の目には生ごみに見えるおからや野菜屑、果物の皮等は、精舎では宝物です。それらで作られた有機肥料は野

菜栽培の糧となり、果物の皮から酵素や石鹼を作ります。酵素は床、溝、トイレの洗剤の他、足を浸ければ脱臭作用があり、入浴にも使えます。天然素材からできたオーガニック石鹼は全身に使える優れものです。おからで作ったそばろはベジタリアン食品として食卓にのぼりません。また台風の時節に合わせて刈り込んだ枝葉を破碎して肥料にすれば、大地に返すことができます。

「細々とした仕事はたくさんありますが、着実に無駄のない日々を過ごしていきます」と、有機肥料と酵素作りを担当す

る徳務（ドウウ）尼は感じるところがあつて、こう述べました。「有機肥料は野菜を成長させる養分で、その野菜は人々の滋養になり、それらが相俟って修行が成就できるのです」。生命が慧命を成就させますが、それは無情の物と有情の衆生が相まって成就した美善なのです。

*

精舎で修行して三十三年、環境保全を受け持って二十年になる徳定（ドゥーデン）

精舎の尼僧は物の命を大切にし、修理を重ねる。アイデアで、廃品となった扇風機の保護カバーを物干しにした。

尼は、資源の回収が大事であることを知っている人は少なくないが、認識を共有する人は多くなく、ましてや共に行動する人は少ない、と言いました。毎日、空き箱や各種回収資源を整理していますが、徳定尼は二十年来、堅持し続けてきました。「この仕事は私の本分であり、責任でもあるのです」。尼僧は地域の環境ボランティアにとっても敬服しています。「皆が身分や地位を忘れて、汚れや悪臭を気にせず、喜んで尽くしてい

るのです。新型コロナウイルスが蔓延していた時でも彼らは続けていました」。法師は弟子たちに仏法を生活の中に根付かせることを教え、資源回収を使命として実践するよう提唱しました。尼僧たちは教えを守って、実践する中で法理を証明し、物の命を永らえ、大地の生命を守っています。精舎の一人一人の行いは些細でも、それらが集まって世界の慈濟人の後ろ盾となり、心の風景を豊かにしているのです。（慈濟月刊六四「五期より」）

尼僧は皆の栄養補給のために、精舎で栽培したサチャインチナツの実を一つ一つ取り出していた。小さな光の下で仕事するのが尼僧たちの物を惜しむ日常である。

環境保全を牽引する民間の力

台湾の環境保護活動は、世界的な潮流の中、素晴らしい成果もありましたが、「このままでは間に合わないのではないか」という焦りは消えていません。各地の環境ボランティアたちは、額に汗流し腰をかがめて手を動かし、人々の消費のスピードに追いつこうとしています。万人の力で億人を動かし、地球が永遠に安泰であるよう護りたいのです。

文・葉子豪

撮影・顔霖沼

訳・有田夏子



――二〇〇年は、慈済の環境保全活動三十周年、また国際的な環境イ

ベント「アースデー」の五十周年にあたる年でもあります。ところが新型コロナウイルスが猛威を振るい、多くの記念イベントや講演会が中止や延期を余儀なくされました。

今年前半の感染ピーク時には億単位の人が仕事や旅行を断念し、中国やヨーロッパの工業都市ではロックダウンや生産停止が相次いだため、各国は感染の脅威と経済危機という二つの問題の板ばさみに遭遇しています。一方で、自然環境は東の間の休息を得ることになりました。スモッグに覆われた空が青く澄みわ

たり、ガンジス川の水は本来の透き通った姿を取り戻したのです。

とはいえ、短期的な改善では大自然の問題が好転したことにはなりません。二〇一九年十一月、欧州議会は「気候非常事態宣言(Climte emergency)」を決議しました。『オックスフォード英語辞典』も二〇一九年を象徴する言葉にこれを選び、地球が既に危機的状況に陥っていると警鐘を鳴らすと共に、人々に速やかに行動を起こすよう呼びかけています。

台湾師範大学環境教育研究所の葉欣誠(イエ・シンチョン)教授によれば、極端な気候変動によって、世界はこれから二、三十年にわたり、さらに大きな災害

に見舞われる可能性があるそうです。気候変動の問題に取り組むにあたっては、まず現状をよく認識し、一歩踏み込んだCO2削減などの措置を取ることが肝要になります。

専門家が警鐘を鳴らしている通り、證嚴法師が環境保全に対して「間に合わない」、「遅すぎる」と心配されていることは決して杞憂ではありません。また、證嚴法師が人々の「共知、共識、共行^㉔」を望むのは、宗教家としての悲観的見解というより、むしろ現代人が直面すべき現実だといえます。

慈済ボランティアは、額に汗して大地を守り続けるだけです。簡素な生活を

送って水や電気を節約し、消費を抑えながら、リサイクルできるものであれば、どんなに小さくてもきちんと拾い、各地のリサイクルセンターで分別と回収を行っています。

ペットボトルはボランティアたちによって踏みつぶされ、本体からキャップと^㉔二〇一五年十二月二十四日法師が朝の会で開示した言葉。誰もが知ることと同じ考えを持ち、共に歩むことを意味する。同月パリでは第二十一回気候変動枠組み条約締約国会議が開かれていた。法師はその後いち早く慈済の取り組みを導いた。



リングを外して、素材別に分けられます。グラム単位で量るポリ袋は二、三百枚でやっと一キロですが、それを面倒臭がる者はいません。

彼らは時間や労力を惜しむことなく、回収物を売ったお金がいくばくかの寄付になるのであれば、交通費や食事代を喜んで負担します。最近流行の言い方をすれば、慈済人のすることはまさに「仏系」の環境保全活動なのです。仏の心を己の心とし、師の志を己の志として、行動から学び、学びから悟る心構えがなければ、数十年一日の如く、努力し続けることは不可能でしょう。

「證嚴法師は、環境保全には目に見えるリサイクルだけでなく、心の教育も含まれていると言いました。ゴミは黄金に変わり、黄金は愛に、愛は清流と化す、その一歩一歩に意味があるのです」と古参のリサイクルボランティア、陳金海（チェン・ジンハイ）さんは言います。

大地の声を代弁し、 環境保全を啓蒙して半世紀

環境保全と聞いて多くの慈済人が思い起こすのは、三十年前、證嚴法師が呼びかけた「拍手する手で環境保全を」とい

う言葉です。歴史的には、人類が環境保全というものを意識し始めて以来、今年で既に五十年余が経過しているのです。

一九六二年に出版されたアメリカの作家レイチェル・カーソン (Rachel Louise Carson) の著作『沈黙の春 (Silent Spring)』は、アメリカ人を驚愕させました。化学薬品による生態環境の破壊が続くならば、いずれは人類自身に危険が及ぶことを知ったのです。「告発者」となったレイチェル・カーソンは、それゆ

●澎湖列島でのリサイクル活動の様子。ボランティアたちは山のように積まれたペットボトルに囲まれ、素材別に分別していた。これは単なるゴミ拾いではなく、資源リサイクルの前奏曲なのだ。

えに化学工業産業界からの攻撃を受けることになりましたが、厳正な科学的根拠に基づくこの主張には、驚くべき影響力がありました。

『沈黙の春』の出版により、アメリカの環境保全活動は一大ムーブメントとなりました。一九七〇年四月二十二日には二千万人の民衆が街頭デモに参加し、最初の「アースデイ」を呼びかけたのです。アメリカ政府は環境保護庁を設置し、議会では環境保全に関する法案が次々と可決され、一九七二年、生態系に対し有害な農薬のDDTの使用が、ついに禁止されました。

で洗浄し、焼却して金や銅などの貴金属を取り出していたため、重大な環境汚染をもたらしたのです。北部の大漢川や淡水河の沿岸もゴミで溢れました。

一九八〇年代半ばから、人々の生活水準や知識水準が向上するにつれて、台湾でも環境保全の動きが強まると、公害や汚染、原発に反対し、生態や野生動物を保護しようという動きがあちこちで生まれました。一九八七年、衛生署の管轄下にあった環境保護局が中央政府レベルにあたる環境保護署に格上げとなり、「水污染防治法」、「空気污染防治法」、「廃棄物処理法」などの関連法規の多くが

その頃台湾では、政府も民間も環境保全への認識が不足しており、この島国の脆弱な環境は経済発展のために重い代償を支払っていました。

賃金の低さと環境基準の緩さという「優れた」投資条件に目をつけた外資系企業は、次々と台湾に工場を設立したのです。彼らは本来負担すべき污染防治コストを節約した代わりに、償いきれないほどの土壌汚染をもたらしました。

台湾人が自らもたらした環境汚染もそれと並ぶほどでした。例えば台南を流れるアーレン川（二仁溪）では、不徳な廃棄物処理業者が川沿いで電子廃棄物を酸

一九八〇～九〇年代に改訂され、環境破壊に対して厳格な規制が敷かれることとなりました。

拍手する手で、ゴミの分別

法の制定・修正・執行に加えて、環境教育も重要な政策の一つです。人々の関心を惹きつけるため、当時の環境政策にはいずれも面白いニックネームがつけられていました。例えば、廃タイヤの回収を「ナポレオン計画」としたのは、中国語のナポレオン「拿破崙」と、破れたタイヤを意味する「拿破崙」の発音をかけ

たものです。また沿岸清掃活動には、「ア
ザラシ計画」という親しみやすい名前も
ありました。環境保護署はさらに、ヨー
ロッパから可愛い「宇宙人型リサイクル
ボックス」を取り寄せたこともありまし
た。こうした工夫にもかかわらず、ゴミ
の分別とリサイクルは、当初なかなか根
付かなかったのが実情です。

「大人たちに話しても、反発を招くば
かりでした。税金を納めているのに政府

●かつてオランダから取り寄せられた「宇宙人型
リサイクルビン」は、4年も経たずに姿を消したが、
台湾の人々に環境保全意識が芽生えるきっかけと
なった。この可愛らしい宇宙人たちは、台湾のリ
サイクル活動の歴史に鮮烈なイメーτζを残した。

は掃除せず、なぜ私たちに分別させるの
かと言われたのです」。初代の環境保護
署長である簡又新（ジェン・ヨージン）
氏は、力なく当時を振り返ります。大人
たちの考え方を変えるのは難しいと悟つ
た政府は、学校教育に力を入れ始めたの
です。時を同じくして、慈濟人は師の教
えに従って、環境保全活動を始め、「ゴ
ミの島」の運命を変えようと取り組み始
めました。

一九九〇年八月二十三日、證嚴法師は
吳尊賢文教公益基金会に招かれ、台中市
新民商工高校で講演を行いました。その
日の早朝、法師が市内を車で移動します



と、夜市が終わった場所にゴミが散乱し、
ポリ袋が風に舞っていたのです。その光
景を見た法師は心中の嘆きを禁じ得ま
せんでした。

法師はその夜の講演で、メインテーマ
であった七月の吉祥月や親孝行と善行に
加えて、もう一つ述べました。「台湾は
風光明媚な宝島です。青々とした山と海
に白い雲が浮かぶ光景はとても美しいで
すね。整頓しようと思う心があれば、今
よりもっと美しくなります。でもそれ
は、多くの人の力が必要です」。

講演の最後に、證嚴法師はこう呼びか
けたのです。「ガラスはガラス、鉄は鉄

に戻るので。人々と政府が協力すれば、世界を清めることができるはずなのです」。聴衆が割れんばかりの拍手をする。と、法師はもう一言添えました。「皆さん、どうか拍手するその手で、ゴミの分別をしてください」。

その日の聴衆には、地元台中の人々だけでなく、彰化県など他県から来たボランティアたちも含まれていました。彼らに多くは深い感銘を受けたそうです。家に帰ると直ちに行動に移し始めたのです。

「花蓮の師匠は、両手を動かしてゴミの分別をすれば、環境を守ることができるとおっしゃいました。もし全ての家か

人々の手本になると高く評価しました。一九九〇年後半から、慈済人は「拍手する手で環境保全を」の活動を展開し始め、台湾の北・中・南部から花蓮の玉里に至るまで、多くの慈済人がゴミの分別と資源回収に精を出したのです。

台中市黎明区に住む慈済ボラティアの簡素絹（ジエン・スウジュエン）さんは、自宅の玄関先にリサイクル拠点を設置し、環境保全の夜明けとの願いを込めて、これを「黎明」と名付けました。彰化県員林の施淑吟（シー・シューイン）さんは回収資源の運搬のためにトラックの免許をとりました。回収物の売却金はガソ

ラ古新聞を回収すれば、環境が守られるだけでなく、それを売ったお金で師匠の病院建設を支援できると思いました」。台中市豊原区の楊順苓（ヤン・シュンツェン）さんが資源回収募金を発案すると、その思いに感動した近所の人たちが次々に協力を申し出たそうです。一カ月後、證嚴法師が再び台中に行脚した時、彼女は慈済で初めての資源回収募金を献上したのです。金額の多少にかかわらず、大きな意義ある行為でした。

法師は、楊さんの心がけは自我への固執を克服するものであり、悪臭を恐れずゴミを分別し、資源回収に励む姿は

リン代にもなりません。それを不満に思うこともなく、リサイクルを堅持しています。

北部に住む陳惠民（チェン・フイミン）さんは、当初はためらいがあったと言います。一九九〇年の末に台北板橋区の台北県立体育館で「幸福人生講座」を聴講した時、證嚴法師が再び、「拍手する手で環境保全を」と呼びかけるのを聞きました。ところが、会場を出てゴミ箱がいっぱい溢れ、紙くずやポリ袋が地面に散乱している光景を見るに見かねたというのに、すぐにその場で拾い始めることはできなかったそうです。



環境保全活動30年 現場を振り返って

1990年、證嚴法師は台中の新民商工高校での講演で「拍手する手で環境保全を」と呼びかけた。

(写真上 花蓮本部提供)

1991〜1992年、慈済は金車文教基金会と協力し、「人間浄土を創る」と題した活動を推進して古紙の回収を手引きし、リサイクルの観念を持つよう呼びかけた。(写真次頁右 撮影・陳淑伶)

1996年、台風9号による災害の後、雑誌『天下』は「美しい台湾、清らかな故郷」運動を推進した。台湾全土の慈済人がこれをサポートし、高雄の紅毛港の砂浜に集まった高雄のボランティアや住民たちがビーチの清掃に励んだ。(写真次頁左 撮影・陳玉芳)

その時、證嚴法師が講演中に諭された「人は誰でも、自分を甘やかしたがるものです」という戒めの言葉を思い出しました。そこで彼女は勇気を奮いおこし、悪臭や汚れも恐れず、探してきた幾つかの大きな袋に、散乱するポリ袋、ペットボトル、鉄やアルミ缶を分別しながら、周囲の人々にも呼びかけて一緒に拾い始めました。心の持ち様を変えたことで、環境保全への道が開かれたのでした。

九〇年代の反省：人間浄土を創る

一九九〇年代初期、環境保全を熟知している者は少なく、また台湾社会には利根的な宝くじが流行っていました。環境問題の根源も人の心にあると考えた慈済は、一九九一年、金車文教基金会と協力して、「人間浄土を創る」と題する活動を展開しました。

同年三月の第一段階のテーマは「思想の浄土」で、「人心の浄化、家庭の浄化、社会の浄化」を目標に、講座や音楽会、園遊会など三カ月にわたるイベントが開催されました。そのイベントは、雑誌『遠見』の選ぶ同年最大の大衆運動と称されました。

一九九二年三月、第二段階としての「人間浄土を創る」というイベントでは、多くの民間組織に協力を仰ぎ、植樹や資源回収を通じて人々に環境の大切さと呼びかけることで、「浄土で生活する」ことを実践に移しました。

またその年、慈済は世界的な活動である「アースデイ」に呼応し、四月十九日

の神木村はほぼ壊滅し、台湾北部では板橋や汐止が大洪水に見舞われました。

天災が去った後、證嚴法師は胸を痛め、弟子たちに切々と訴えました。台湾は小さな島であり、大切にしなければ「地図がすっかり変わってしまうこともありうるのです」。

證嚴法師の訴えに呼応した雑誌『天下』は、慈済や台北市環境保護局、新竹工業研究院など十七の組織に呼びかけ、「美しい台湾、清浄な故郷——九九九（九と久は発音が同じ。永遠を意味）、みんなと一緒に清掃しよう」というイベントを共同で開催しました。

に八つの県と市に跨がる九つの拠点で、同時に「福を知り、福を大切にし、更に福を造る——古紙回収で台湾の森林を救おう」と題したイベントを開催しました。六時間にわたるイベントの間に各地の住民から集められた古紙は、百六十トン余りに上り、その売却金はすべて慈済医学院の建設資金にあてられました。こうして「ゴミが黄金に変わり、古紙で名医を育む」という功德が達成されたのです。

一九九六年七月八月に台湾を襲った台風九号は、再び台湾の環境に警鐘を鳴らすものとなりました。苗栗県三義郷では土石流が人命を呑み込み、南投県信義郷

これは「人間浄土を創る」に続く環境保全の一大ムーブメントとなりました。

慈済を含む数百の民間団体と五万人の民衆がこの活動に参加したのです。十月二十日、旧暦九月九日の重陽節の午前九時ちようどに、一万人にのぼる慈済人が十八の県と市に跨がる四十以上の拠点で「九九九、みんなで清掃しよう」と声をかけあいました。紅毛港付近の砂浜では、年離れた高雄のボランティアたちが腰をかがめてゴミを拾いました。花蓮のリサイクルボランティアたちは、小雨の中で落ち葉を掃き、故郷の台湾東部を清潔な街に仕上げたのです。



慈済の古紙回収拠点

1992年、「人間浄土を創る」と題した古紙回収活動を経て、台湾全土の慈済ボランティアが定期的な古紙回収拠点を設け、住民にリサイクルを呼びかけた。花蓮では毎月第1日曜日に住民が古紙を持ち寄り、ボランティアがトラックで回収拠点を回って集め、回収業者に売却した。写真は花蓮の玉里にある鴻徳医院の回収拠点。(撮影・張澄淇)

初めての海外清掃活動

1992年、慈済の環境保全活動は海を渡った。ニューヨークのボランティアは同年6月、支部の近くで「コミュニティを愛し、清らかな大地を守る」と題した清掃活動を展開した。ボランティアたちは帚を片手にゴミの散乱したチャイナタウンを清掃した。(写真の提供・慈済ニューヨーク支部)



最初の環境保全教育センター

高雄市仁武区八卦寮のリサイクルステーションは、1999年に国立中山大学慈済人文課程の教師と生徒を招き、資源の分別や環境保全の知識を学んだ。その後も各種団体の見学を受け入れ、環境保全教育を推進した。比較的規模の大きなリサイクルセンターは徐々に環境保全教育センターの役割を担うようになったが、八卦寮リサイクルステーションは、その先駆けの1つである。(撮影・顔霖沼)

台湾北部初の資源回収トラック

1991年、板橋の慈済ボランティア陳蕙民さん(右から3人目)は、「標会」という方法で得た20数万円で慈済台北地区における初めての資源回収トラック「環境1号」を購入した。この車両はボランティアが運転する専用車であり、各地区の固定回収場所を機動的に巡回しながら住民が持ち込んだ資源を回収し、整理した後に売却先へ運んだ。(写真提供・陳蕙民)



「資源回収に

取り組むことは、すなわち福を修めることです。環境保全の考え方を人に教え、その人もそれを実行したならば、それは智慧を修めることとなります。自ら行い、人に教えれば、とても大きな力が生まれます。人々が努力して

働く姿をご覧になり、證嚴法師はボランティアたちが各地域にこれを広めていくことを望んだ。こうしてリサイクルセンターやボランティアが少しずつ増えていくことで縁が広がり、更に多くの菩薩が集まることになりました。

新たなミレニアムへの精進・腰を低くして働き、顔を上げて呼びかける

政府は埋め立ての代わりに焼却を採用し、公的機関と民間団体はゴミの分別の普及に努めました。ミレニアム後の台湾は、前世紀の八十、九十年代よりも清浄になったのです。

「数字」は口ほどにものを語ると言います。環境署の統計によれば、台湾のゴミ運搬量は一九九八年の八百八十万トン余りから二〇〇〇年には七百八十万トン余りへと減少し、二〇〇六年にはさらに五百万トンへと減少しました。一方資源

早く、「ゴミが黄金に変わり、黄金が愛の心に変わる」という精神を発揮していました。一九九八年に大愛テレビ局が設立されると、環境保全による収入は主に大愛テレビの運営資金として使われるようになり、「愛が清流と化し、清流が全世界を巡る」というメディアの機能と社会教育を支えています。リサイクルボランティアは資源の回収からお金を得ることはありませんが、お金では買えない健康と喜びを得ています。

「いつも四時前には家を出ます。自転車の後ろにゴミを集めるための籠をつけて八掛山のみもとまで行って、そこから

回収量は一九九八年の十二万九千トン余りから二〇〇六年の二百十八万八千トン余りへと約十六倍に増加したのです！

ゴミの量は徐々に減少し、政府による焼却場の建設数は三十六基から二十四基へと減らされました。予想以上の効果が見られたのは、環境署が一九九七年より各地の住民、地方政府のゴミ処理隊、回収業者、回収基金を結びつけた「四合一資源回収」体制を敷き、住民やゴミ処理隊、回収業者が、資源回収により得られる利潤や報酬を目的として、自発的に参加するようになったおかげでした。

慈濟は政府が普及活動を始めるよりも

徒歩で山を登るのです」。彰化県の慈濟ボランティアである黄蔡寛（ホアン・ツァイクアン）さんは、運動を兼ねて山道の紙屑やビン、缶などを拾っています。百歳を越えた彼女は、周囲から同情の目で見られても気にせず、腰をしゃんと伸ばして大声で言います。

「環境保全のおかげです。体も元気で、悩みもありません！」

西欧諸国は議会でも法案を可決して政策を立て、他律的な強制力によって政府や企業、民衆に環境を守らせるのに対し、慈濟はまず個人の心に働きかけ、簡素な生活を勧め、人々を自然に資源回収拠点

リサイクルの10指口訣

回収資源の分別の仕方：口訣で覚えよう！

P プラスチックボトル
(プラスチック製品を含む)

瓶 ガラス瓶

缶 アルミ缶

缶 スチール缶

紙 古紙、紙容器

電 電池、蛍光灯 (有害回収物)

1 衣類

3 三つの家電機器
(家電、パソコン、携帯電話)

5 金属製品

7 その他 (自転車、車・バイク、傘など)

へと導きました。大地と生態系のために力を貸すことで「反省して自分に要求し」、「自ら悟り他に覚らせる」という東洋文化を体現していると言えます。慈濟を見学しに来訪した欧米人が、ボランティアアたちの信仰心と敬虔さを目にして感動するのはそのためでしょう。

多くの慈濟人は黙々と環境保全に努めています。最近では胸を張って自分たちの成果を語るようになりました。二〇〇六年、慈濟の実業家ボランティアが技術的な課題を克服し、回収したペットボトルから災害支援用のエコ毛布を作り、量産化することに成功しました。これは慈濟人が環境保全に力を入れている

ことの有力な証にもなりました。

「このエコ毛布は、リサイクルボランティアと実業家ボランティアの愛でできているのです。ですからこれを受け取った人は、あふれる愛を感じるはずですよ」と実業家ボランティアの李鼎銘（リー・ディンミン）さんが言いました。

回収されたペットボトルからリサイクルされて量産化されたエコ毛布は、既に全世界で百万枚余りが配付されています。フィリピンにおける台風ハイエン（二〇一三年・台風三十号）の被災者やシリア難民、そしてコロナウイルスと戦うアメリカの貧困者など、世界中の人々に送り届けられています。

資源回収品から作られた救済物資は、環境保全と人道支援の両者をパートナーに結びつけました。エコ毛布は国連などの国際的舞台でもたびたび報告され、廃棄物処理と災害支援の解決策を求める世界に、新たな視点を提供したと言えます。

新しい世紀の慈済の環境保全はより厳しい試練に直面するでしょう。慈済は台湾における環境保全を深耕し続けると同時に、世界を牽引していこうとしています。万人の力で億人を動かし、共知、共識、共行^④で以て、地球のため、そして現代に生きる人々と未来の子孫のために、永続的な平和を確保していきたいのです。この長くて遠い道のりは、一生かかって

も終わりが見えないかもしれませんが、それでも慈済人は、固い決意で人々を導き、共にこの道を歩み続けるのです。

(慈済月刊六四五期より)

^④二〇一五年十二月二十四日法師が朝の会で開示した言葉。誰もが知ることで同じ考えを持ち、共に歩むことを意味する。

参考図書

1・『沈黙の春』(中国語翻訳版原題：寂靜的春天)。レイチエル・カーソン Rachel Louise Carson 著、李文昭訳、晨星出版社、2018年1月第3版。

2・『レイチエル・カーソン——筆の力で環境保全の新天地を切り開いた闘士、カーソン没50周年記念集』(中国語原題：瑞秋・卡森——以筆開創環保新天地的鬥士、卡森辭世五十周年記念集)。金恒鏢と蘇正隆の編集、方力行等が執筆、農委会林務局と書林出版、2015年5月共同出版。

3・余鳳高「環境保全運動の誕生、レイチエル・カーソン生誕百周年を記念して」(中国語原題：環保運動的誕生、紀念雷切爾卡遜誕生一百周年)。月刊誌『歴史』235期、2013年2月

号掲載。

4・施信民「台湾環境保全運動略史」(中国語原題：臺灣環保運動簡史)。『國史館館刊(國史館館刊)』復刊第41期、2006年12月31日刊行掲載。

5・黄蔡寬叙述『心寬な世紀：時代の女性 黄蔡寬の物語』(中国語原題：心寬世紀：時代女性黄蔡寬的故事)。彰化記録ボランティア編集、慈済メディア人文志業基金会、2019年8月初版。

参考資料出典

環境保護署ウェブサイト、慈済基金会文史処及び宗教処環境保チーム。

簡素絹

台中市黎明コミュニティ在住
公務員退職
リサイクルボランティア歴三十年



【環境ボランティアとリサイクルの歩み】

文・葉子豪 撮影・顔霖沼 訳・高雪白

三十年続くとは思ってもせず

台中市南屯区黎明コミュニティの黎明リサイクルセンターは、慈済が

早期に設立した資源回収分別拠点の一つである。簡素絹（ジエン・スウジュエン）さんがこのセンターでボランティアを始めてから三十年が経った。あの日、講演会で證嚴法師が「拍手する手でリサイクルしましょう」と呼びかけた時、簡素絹はその会場にいた。

「法師の言葉を聴くまで、リサイクルについて話すとは知りませんでした」。

今年七十六歳になる簡素絹さんは、その時の事を思い出して話してくれた。会場は今の新民高級中学校の講堂で、人でいっぱいだった。簡素絹さんは中学を卒業したばかりの娘の林令怡（リン・リンイー）さんと一緒に法師の話を聴いたその時、善念が芽生えた。一カ月後、法師が行脚で再び台中を訪れた時、認証を授かったばかりの簡素絹さんは師匠に会いに行つたが、丁度そのとき楊順苓（ヤン・スンリン）さんが慈済で最初の回収物で得たお金を寄付

している姿を目にした。

「私にもできる！」と簡さんは思い、楊さんの話と法師の励ましを聞いて、手近なところから始めようと思った。当時、簡さんは夫を亡くし、女手一つで息子と娘を育てていた。職場の水道局は新聞をとっていたので、事務所の古新聞を回収することから始めた。少なからぬ同僚も賛同して自分たちの家から古新聞を持ってきて、彼女に渡すようになった。「他に使用済みの紙類や段ボールもあり、整理してから車で取りに来てもらいました。一月にトラック一台分を売りました。売り上げは黎明コミュニティの名義で慈

済に寄付しました」。

簡さんは中部地区で最も早くからリサイクルし始めた数人のボランティアと同じように、彼女も収集地点をコミュニティ内の自宅の前に設置した。しかし、暫くすると近所の人からはもし子供のいたずらで火事になったら危ないと言われ、回収物を自宅の前に置くのは、近所の人が嫌うだけでなく、二人の子供も賛成しなかった。

自宅の前に古新聞や段ボール箱などを積み上げていると、まるで生活に困っているかのように見られるので、当時十七歳だった娘さんにとっては堪えられな

かった。「でも母は止めず、後に場所を変えてくれたので、胸を撫で下ろしました」。今、中年になった娘さんは笑って言うようになった。

自宅の前からガジュマルの木がある空き地へ、そして慈済委員らが好意で提供してくれた庭先など、回収拠点は前後合わせて六回も引越しをした。その間、積んでいた回収物に爆竹が燃え移った事があったが、幸いにも無事にすんだ。いろいろなことを経験しながら行ってきた過程で、簡さんは安全で衛生的に作業をしやすくする方法を考えた。

各自が自宅で簡単に整理し、毎週水曜

日の朝八時に今のリサイクル拠点に持ち寄るようにした。そして、そこで整理、分別、運搬すれば、一時間ほどで元通りにして、緑豊かな場所にする事ができた。

「やってみると身体が軽くなりました。一日中仕事で机に向かってばかりで運動不足でしたから」。公務員から退職し、今では元気はつらつとしている。「私は、三十年も続けられるとは思っても寄らなかつた、と師匠に言いました。これからもリサイクルを続けて行きます。やればいいのです！」と口下手な彼女は酸いも甘いもあつた過去を振り返りながら言った。(慈済月刊六四五期より)



林維揚、蔡雅純

高雄市在住
ビーガンベーカーリーを經營
環境ボランティア歴5年

【環境ボランティアとリサイクルの歩み】

文・葉子豪 撮影・顏霖沼 訳・御山凜

賛同し、感想を分かち合い 皆を誘って始めよう

多くの年配ボランティアがリサイクル拠点に通って作業しているのを見ると、ある疑問が浮かぶかもしれない。「若い人ならどうするだろう?」。

「平日は仕事があつて、休みの日はゆっくりしたい。若い人と年配の人では気持ちの上で差があるのです」。「八十年代前半世代」の高雄ボランティアの林維揚（リン・ウェイヤン）さんは、若い人を慈済の環境保全活動に誘いたい

のなら、先ず彼らにエコ活動はかっこいいことだと思ってもらうようにすることだと言いました。「実は生活態度次第なのです」。

林維揚さん、蔡雅純（ツアイ・ヤーチュン）さん夫婦は、二〇一七年、高雄の若者ボランティアと一緒に「静思太鼓チーム」に参加し、「軽発孝読書会（孝行を啓発する勉強会）」を立ち上げて『父母恩重難報経』の教えを勉強すると共に、

SNSを通じて若い人との交流を増やし
ながら、慈済の理念を伝えていきます。

ソーシャルメディアでは、ベジタリアン
に関することの他、リサイクル活動や海
岸の清掃など環境保全に関する最新情報
を多く載せており、これほど注目されて
いるということは、皆が気候の変化を強
く感じているからです。

「私たちは以前、イギリスで勉強して
いて、後に機会があつて再び訪れた時
にはもう大きく変わっていました」。夫
婦は二〇一八年にロンドンへ旅行した
時、以前の夏は高温でもせいぜい、摂氏
二十一度か二十二度でしたが、その時は
既に三十度を超えていました。公園の芝

の問題についても呼びかけました。

「去年の『独身の日』を前に私たちは、
ネットショッピングで多くのゴミが出る
ことに注意してほしい、と呼びかけ合
いました。例えば小さな商品一つを購
入しても大きな箱に入っており、箱の中は商
品が幾重にも包まれています。この事を
LINEグループで情報提供し、配送が
どれだけのゴミを出すのかをみんなにも
理解してもらいました」。

SNSで環境保全に関する写真や動
画、情報や関連サイトなどをシェアした
り、チームで慈済のリサイクルセンター
への参加を呼びかけ合う他、海岸の清掃
は欠かす事のできない活動です。リサイ

生も黄色く枯れて、気象と光景は全く変
わり果てていました。「本当にみんなの
関心が必要なのです！」

リサイクル活動を定着させようと、夫
婦二人が高雄でベーカリー工房を始めた
時、地元の有機食材を使ってカーボンフッ
トプリントを削減するよう努め、店ではビ
ニール袋や紙袋を提供せず、お客さんにエ
コバッグを持参するよう呼びかけました。

日々の生活の中で自分が実行すれば、
人々に呼びかける際も説得力があるもの
です。「軽発孝」の集まりでは車の相乗
りや自転車を利用し、外出時はコップ、
茶碗、箸を必ず持参します。夫婦とも時
代に沿って電子商取引における商品梱包

クルセンターはゴミを宝にするだけでな
く、大衆を教育する機能を持っています。

「父は慈済が鳳山で環境保全活動を広
めた当初のボランティアの一人で、私も
小さい頃から手伝いに行っていました」
と当時のことを思い出しながら、あの場
所は自分にとって遊園地のようなもの
だったと語ってくれました。今、彼女
は改めてリサイクル拠点に通うようにな
り、着実に仕事をしています。

今年は新型コロナウイルスの影響で、
高雄の静思太鼓チームは予定通りに活
動はできませんが、機会があつて若い
ボランティアを誘い、毎週土曜日の朝
に鳳山連絡所で回収物の分別や果物を入

リサイクルが いつまでも終わらない のはなぜ？

新し物好きで古いものを嫌い、目まぐるしく物が入
れ替るが、古いものをゴミとして捨てるのも忍びない
ので、全部リサイクル拠点に持っていけばいい…

底なしの欲望に対して、環境保全は「心」から
始めなければなりません。買い物する前に、
「必要」なのか「欲しい」のかを考えま
しょう。まだ使えるものを使い続ける
ことは、地球を守ることに繋がります。



絵・凌苑琪

れるビニール袋の整理をすることにし
ました。人手が増えると、より早く終わら
せることができ、毎回参加してくれる若
いボランティアにとつても自分の生活習
慣を見直し、ゴミを減らすことを考える
きっかけになりました。さらにSNSに

投稿して広めていくうちに、より多くの
人に共感を持ってもらうことができまし
た。「私たちは若い人たちに呼びかける
チームです。その影響力で、呼びかけが
更に広がって欲しいと思っています」。

(慈済月刊六四五期より)

欲望を清めることは、心のエコであり、
環境保全の源でもあるのです。



捨てる水はない 生活の知恵

人は一日にどのくらい水を必要とするか？大切に使えば、何度も使える。

知恵を働かせて、水を最大限に活用することである。

面倒なことも習慣になれば、それは自然な振る舞いとして現れる！

マレーシアのマラッカ州では今年一

を実施した。

月末から給水制限が出され、隔日給水が実施されている。主な原因は、天気が暑くて長い間雨が降らなかつたため、ダムの貯水量が激減したからである。州内に三基あるダムのうち、二基の貯水量は三十%しかなく、干ばつの悪化を避けるため、関係当局はやむなく給水制限

水がなければ日常生活はとても不便になる。人々は家の中のあらゆる容器を取り出し、水を溜めて今後に備えた。会話の話題の多くが、「お宅には水はありますか？」「水圧が足りなくて、ポンプを使っても上の階に届きません」、「水がないと本当に困りますね！」というものだった。

万物は水が必要

節水の習慣を身に付けよう

八十一歳の周珠英（ジウ・ズーイン）さんはボランティアの陳翠蘭（チェン・ツェイラン）の母親である。陳さんは幼い時から母親が水を大切に使うのを見て、感心すると同時に文句もあつた。彼女の意志と堅持には感服したが、過度に節水して生活廃水を再利用していたため、家の衛生環境を心配したのである。

周さんの父親は農業を営み、灌漑や家畜の飼育で毎日大量の水を消費した。田んぼ沿いの川が主な水源で、家には水道がなく、生活用水は全て百メートルほ

ど離れた井戸から汲んでいた。純朴な彼女は記憶を呼び起こしてこう言った。「担いで帰ったばかりの水は飲料用と炊事、そして両親の入浴に使われるだけでした。私たち子どもは井戸端で体を洗ったり、洗濯をしたりしました。もし全ての水を家まで運んでいたら、大変な重労働だったでしょう！」。

周さんは幼い頃から生きとし生けるものは全て水に頼らなければならないことに気づき、水資源をとっても大切にしていた。十八歳の年に結婚し、夫の家で水道のある便利な生活になつても、彼女は水を浪費したりしなかつた。

周さんは日々の三食の米や野菜をまと



めて洗い、その水も食器を洗った後の水も溜めておいた。そして、それを前後の庭の野菜や花などにかけて。水は重くても、捨てるのは惜しかった。洗濯する時は、洗濯機の側に大きなたらいを置いて排水ホースからの水を入れ、それをトイレの洗浄に再利用した。

子どもたちは小さい時から、母親が頑なに節水を実践する姿を見て影響を受けてきたが、彼らの実行力は母親に遠く及ばなかった。陳さんは、慈済に参加してからより生活に密着した環境保全を理解し、節水、節電の大切さがもっとよく分かるようになった。しかし、便利な日常生活では、蛇口をひねると水が出て、ス

イッチを押すと電気がつくため、母親のように単純に真面目に堅持することは難しいに違いない。

夕日が沈んで、部屋が暗くならないと周さんはけっして電灯をつけない。陳さんは母親の安全を心配しているが、周さんは当然という口調で、「一日にバケツ二、三杯の水が溜められるのですから、それを捨てるのはとても惜しいことです。また、暗くなつてから電灯を点けるのは当然で、まだ見えるうちに点ける必要はありません」と言った。

年配の人には生活の知恵があり、子供たちは賛同できなくても、親に従うしかない。近ごろ周さんは腰痛で体力も衰え

たが、依然として節水は実行している。「節水はしなければなりません。さもないと必要な時に足り無いことになります。やる気さえあれば、難しくありません」。

周さんは水不足を経験し、見てきたため、過度の浪費は次世代に水不足をもたらすと信じている。昔は井戸や川があり、水不足を心配したことはなく、家の前の溝には澄んだ水さえ流れていて、干上がることとはなかった、と彼女は言う。便利な水道ができてから、かえって水不足の問題が浮上し、河川や溝も枯渇する現象

●周さんはいつも1日3食の野菜と米をまとめて洗い、その水を花壇や野菜畑にまいている。

(撮影・顔玉珠)

が現れてきた。

現代的生活習慣に気候変動の影響が相まって降雨量が減少し、自然と水資源の問題が生じている。マラツカは長期的に給水制限を実施しているが、周さんは他の人のように争って水を溜めることはせず、生活も影響を受けていない。「給水日にバケツ二杯の水を溜めて置くだけです。一杯は断水日の飲料用に、もう一杯は洗浄に使います」と彼女は生活の知恵を分かち合った。

風呂に使うお湯は、やかん一個の水を沸かすだけで十分で、野菜は朝十時に断水する前にまとめて洗えばいいし、トイレの洗浄や花、野菜にやるのは使った水を再利用すればいい。人が一日に本当に

しています」と彼女は率直に言った。

羅さんは子どもの頃、家が貧乏で、ゴミ園で働いて家計を助けていたが、家事も手伝わなければならなかった。小さい体で水を運んだり、井戸端にしゃがんで一家三人の服を洗濯したりした。「井戸水を汲むのも洗濯するのも大変な仕事でした。ずっと苦勞してきたから、水の大切さがよく分かるのです」と彼女が言った。

羅さんは今でも手で洗濯している。彼女は、「洗濯機は一度に水をいっぱい入れ、何回も洗うので、大量の水を浪費します。手で洗えば、バケツ三杯の水で済むのです!」と言った。

羅さんはその日のうちに洗濯を済ませる習慣がある。ボランティアの戴金蓮(ダ

必要とする水の量はそれほど多くはないと周さんは信じている。誰もが水を大切にすれば、水不足の問題は確実に克服することができる。

心の持ち様を変えれば、 日常茶飯事のようになる

周珠英一家と状況が似ているのは、五十三歳のボランティア羅惠蘭(ルオ・フエイラン)さんだ。幼い頃、水を運ぶ手間を省くために、洗濯や入浴を全て井戸端や川岸で済ませていた。その後、水道のある家に移転したが、やはり井戸に頼っていた。「井戸水は無料なので、できるだけ有料の水道水を使わないように

イ・ジンリエン)さんはそれを知っていた。「慈済の活動に参加する時、よく羅さんの車に乗せてもらうのですが、夜の十時に活動が終わるや否や、よく彼女が、早く帰って洗濯しなければ、というのを聞きます」。

仕事と家事で忙しい羅さんは、夜の十一時や十二時過ぎまで洗濯して服を干すことが多い。時々旅行から帰っても、一家三人の二、三十枚もある服を彼女は頑なに洗濯機を使わずに洗うが、辛いとは言わなかった。彼女は、毎日洗濯すれば、量が少ないため大変だとは思わない。心の持ち様が大事であり、しようとするかどうかである。「心の持ち様を変えてプロセスを楽しめば、続けていくことが

できます」と羅さんは言った。

羅さんは洗濯で使うのは「バケツ三杯」の原則を貫き通している。先ず、洗濯物を洗剤水に浸して手で洗い、一杯目のバケツの水で泡を洗い流し、残り二杯のバケツの水で繰り返しすすぎ洗いをする。衣類だけでなく、彼女はカーテンやシャツも手で洗い、洗濯機は脱水に使うだけである。

考えてみると、彼女が小さい時から今に至るまで、洗濯だけでもどれだけの水を節約してきたかが分かる。他の家事でも節水を心がけている。例えば、床掃除の場合、モップが浸せるだけの水をバケ

などから出た廃水は全てトイレの水洗やガレージの床の洗浄に再利用してきた。

時代と共に生活が豊かになると、人々は資源の節約を考えなくなり、利便性とスピードを求めるようになったと羅さんは言う。例えば、十三歳になった羅さんの娘の彭奕霖（ポン・イーリン）さんは慈済大愛幼稚園に通っていて、学校で資源の大切さを絶えず教えられていたため、水を浪費せず、蛇口をひねる時も水量に気を配っている。手で洗濯するよう頼むと、しゃがんでするのが辛いので、立って手で洗う。しかし、選択する余地があるなら、洗濯機の利便性はやはり彼女の第一選択肢になる。

給水制限で、羅さんは食器洗いにもバ



●羅さんは、節水のため洗濯ではバケツ三杯の原則を実践し、カーテンやシャツも手洗いしている。
（撮影・彭奕霖）

ツに入れて全ての床を拭く。入浴の場合も水を細く流して手早く済ませるようにしている。洗濯に限らず、床拭き、入浴

ケツ三杯の原則を実践している。一杯目に食器洗いの洗剤を入れ、二杯目と三杯目はすぎに使う。今回の給水制限は絶好の教育チャンスだと羅さんは思っている。利用が制限されれば、節水の方法を考えるからだ。「若い世代は便利で快適な生活をしていて、水資源の大切さを知らないから、今この時こそ昔のような物資不足を体験してもらいたいです。年配の人がどうやって知恵を働かせながら生活していたのか、その中には数多くの妙法がありますから、学ぶ価値は大きいと思います」。

水は万物の命の源である。しかし便利な生活に慣れていると、人々は自ずと水を浪費しても気がつかない。水が使える

時に、水のない辛さを考えるべきである。周さんと羅さんの節水実践を見習い、それぞれ自分自身で水の使い方を見直すことを期待している。そこから目覚めると、

「面倒が習慣になり、習慣が自然体になる」。水資源を大切にすれば、大自然の資源は末長く維持できるだろう。（慈濟月刊六四二期より）

【證嚴法師のお諭し】



医療の愛は忘れてはいけません

◎ 訳・慈願 絵・林淑女

被災、怪我、病の「苦」に対して、
医療人員は一心に「治療」し、苦勞を厭わず苦しみを取り除いてくれる。
医者と患者の関係において、「患者の苦しみが医者を成長させる」。
この愛の力を忘れてはいけない。

大林慈濟病院が開業して今年で満
二十年になりました。八月八日の祝賀
会はオンラインで参加し、白衣の医師
と看護師たちのはつらつとした姿を映
像を通じて見ることができました。各
科の医師たちが患者を伴って壇上に上
がり、それぞれ難病を克服した経過を

報告していました。病に苦しんでいた
患者は受け入れてくれるところがな
く、最後に大林慈濟病院にたどり着い
た時、看護師が手当てして慰め、医師
たちの細心の医術と愛で人生を取り戻
しました。

患者が次のように語りました。生き

るか死ぬかの瀬戸際の辛さは筆舌に尽し難いほどですが、治療後は病苦から解放されて、今のように仕事して家庭も護ることができるようになりました。私はそれを聞いてとても安堵し嬉しくなりました。医師たちが力を尽くしたのは大変な苦労だと思います。患者と患者の関係において、「患者の苦しみが医者を成長させる」のです。

医療人員一同が同じ志を持ち、命と健康、愛を護り、どこかで欠員すれば駆けつけて補い、雲林嘉義地域全体に貢献していることに感謝します。八大

て恩返しできるでしょうか。

大林慈濟病院の二十周年記念活動が終わった日の午後、ペナンとケダ州からネットを通じて報告がありました。今年マレーシアで医療を開始してから二十年目なのです。そして腎透析センターの無料サービスは設備が良好だけでなく、医療人員が貧困に苦しむ患者に対して愛を以て世話しています。また、私は彼らが患者に対して「苦から逃れた後に説法」をしていることに感心しました。心に法の潤いを受け、病が治った後、ボランティアになってい

功德の中でその最たるものが医療であり、大林慈濟病院は正に医療の「大功徳林」ではないでしょうか！

二十年の間に医療人文を成し遂げたことは感謝に耐えません。鄒清山（ゾウ・チンサン）居士とお嫁さんの林淑靖（リン・スーチン）さんは病院建設のために敷地を提供しただけでなく、建設中も居士夫婦が毎日職人たちのためにお茶の用意してくれました。

これほど多くの慈濟人の奉仕によって慈濟四大志業が成就したのです。これだけの情を、私は生生世世にわたつる人もいます。

ボランティアと慈濟人医会は協力して五、六百家所の診療所で、地域の貧しい患者をケアしています。災害や怪我、病の「苦しみ」に対して医療人員が心からのケアで痛みに対処しているのを見ると、その愛の力を忘れることはできません。私はマレーシアに行つたこととはありませんが、彼らは私が願つた医療品質を実現させています。彼らの真摯なる愛を感じると共に、菩薩がこの世に存在するのを目の当たりにしました。

八月十七日、花蓮慈濟病院が三十四

周年を祝いました。あの年は忘れられ
ません。台湾東部の人々は医療不足で
苦しんでいるのを見かねて、心に病院
建設の一念が浮かび上がりましたが、
自力ではどうにもなりません。しかし、
やらねばなりません。一度また一度と
困難を乗り越えて無から有が生まれま
した。その間には数えきれないほど多
くの人の協力と投入があつたからこ
そ、現在の医療チームが日々人助けの
使命を発揮できているのです。一念を
堅持すれば、時間が全てを成就させて

くれます。

人は元より仏心が具わっており、仏
心には愛が満ちていて、慈悲喜捨の精
神は至る所に存在しています。皆で限
りない愛を広げて社会に入って行くこ
とができます。もし狭い眼前のことだ
けにとらわれていれば、愛することも
欲望を満たすこともできないために無
明の煩惱が起き、生生世世にわたって
その苦勞が付きまといます。

苦難の衆生を救うという発心立願を
立てれば、人生の価値は絶え間なく上
昇します。土地を潤そうと思うなら、

突然の大雨でも一滴の水でもなく、雨
露のように絶えず潤すことです。善行
とは一時的な思いつきや表向きの善
意、付き合いではありません。意義の
あることを選択し、心に銘記して続け
ることで、善の種を植え、太陽と天気
が相まって芽を出し、大樹が成長する
のです。

善いことはすぐに実行すべきです。
縁を逃さず、苦難にあえぐ人にはそれ
が必要なのです。「あなたが苦しんでい
ることは分かっていますが、あなたを
助けられるまでになつたら戻ってきま

す」と言っではいけません。今すぐに
尽くしましょう。時機を逸すると人助
けのチャンスがあるとは限りません。

正しい方向を選んだら、直ちに行動
に移すことです。良いことなら心を込
めて直ちに行動に移し、途切れさせて
はいけません。もし躊躇して前に進ま
なければ、考えさえ変わってしまうか
もしれません。一分一秒、心して善念
を守って偏らず、「あらゆる善に努め」、
また「細心に奉仕する」ことが大切です。
皆さんの精進を願っています。

(慈濟月刊六四六期より)



人生の引き継ぎ

人、事、世とは争わなくても、
責任を持って人生の使命を全うしなくてはいけない。

◎文・釋徳仇／訳・済運

新しくなった学校に無限の希望

苗栗県の徐耀昌県長が、県政府のチームと減災希望工程の支援を受けた学校の校長先生たちを引率して精舎に上人を訪ねました。子供たちが広々とした新しい校舎で楽しく学習し、静思語学習を取り入れている様子を報告しました。

苑裡高校の張逢洲校長先生が報告しました。「学校は上人が歳末

祝福会で提案したテーマの『修福粒米藏日月、持慧毫世有乾坤^①』を使って、四棟の校舎を修福楼、日月楼、持慧楼、乾坤館と名付けました。講堂は老朽化して建替えていたため、三年続けて芝生にテントを張って卒業式を行いました。来年は乾坤館で行うことができます」。

上人はこう言いました。

「子供たちの学齢期は限られており、小学校から中学、高校という人生の過程では、教室で授業を受ける以外に、環境による教育も非常に大切です。しっかりした安全な校舎で授業を受け、青い空と大地が映える緑豊かな校内の環境の中で走り回る元気な子供たちを見ていると、無限の希望が感じられ、とても嬉しくなります」。

①：二〇一六年歳末祝福感恩会のテーマ。「福を修める…米粒を大切にしたい歲月。智慧で理解する…どんな小さな力も無視してはいけない」。



→カメラマンの阮義忠さん(左)は最近新しく出版した『台湾民間影像史冊：阮義忠經典写真集』を上人に贈呈した。

(6月19日)

「慈濟は、世の人々に奉仕する精神から古い校舎の建て替えを引き受けました。特に私は一生、人や事、世と争ったことはありません。それは人間(じんかん)にやって来た使命を心得ているからで、縁を大切にして自分がすべきことをしているだけです。私はいつも何も求めず、ただ『感謝』の気持ちがあるのみです。感謝したいのは全世界の慈濟人に対してで、彼らは一緒に責任と使命を担い、少しずつ力を結集して世の人に奉仕しているのです」。また、上人は、「慈濟の力は全世界の慈濟人がもたらしたものであり、社会の大衆の愛の奉仕によるものです。『社会で得たものを社会に還元する』ことは慈濟の責任と使命なのです。県政府と校長先生たちが慈濟志業に賛同し、支持してくれていることに感謝します。皆が志を一つに地方や台湾の教育に尽くしていくことを期待しています」と言いました。

写真に見る生命力

阮義忠(ルワン・イージョン) 師兄(スーシオン)と袁瑤瑤(ユエン・ヤオヤオ) 師姐(スージエ) 夫婦は『台湾民間影像史冊：阮義忠經典写真集』十冊セットを贈呈しました。一枚一枚の写真は全て、阮師兄がこの半世紀に訪れた先々で撮影した貴重な人物と風景及び法師に追隨した十五年間の写真です。この写真集は彼の人生七十年を回顧した作品とも言えるものです。

上人は阮師兄にこう言いました。

「数十年の人生は一分一秒の積み重ねで成り立っており、生命の価値もその一分一秒の中に蓄積されています。あなたがカメラを持ってシャッターを切るのは数秒間に過ぎず、それが永遠に残る歴史の一コマとなり、映像はその一秒間の中に留まっています、人

生は過ぎていきます。先ほど顔見知りの人の写真が出て来ました。高信疆（ガオ・シンジャン）さんは早くに亡くなりましたが、他の多くの人はご健在で、自分や亡くなった人のために歴史の証人となることができます。「そして世代交代です。年配の人はやがて時間と共に消えていきます。ですから私たちは引き継ぎをしなければいけません。私は毎日、引き継ぎをしています。と言うのも、人生は無常な故、いつ何時尽きるか分からないからです。毎日話していること全てが慈済人に対する最も誠意のある引き継ぎなのです」。

九二一地震の後、阮師兄は慈済の支援建設である「希望工程」の写真を数多く撮りました。上人は、彼がとても価値のある一枚一枚の写真で以て、生命、歴史、文化を記録してきたことに感謝しました。「精舎の花や草、木一本を見ると、故陳さん（法師専属カメラマン・陳友朋「チェン・ヨーポン」師兄、愛称：小陳）のこ

とが思い出されます。彼は精舎に住んでいた間、私が行脚に行かない時は精舎の中で写真を撮っていました。葉っぱ一枚にしても実によくその境地を表しており、葉の先端の水滴が生命の美しさや自然の美しさを感じさせます。彼がこの世を去って何年にもなりますが、彼が撮った写真は残っており、そこに生命力を見ることができます」。

「高居士が精舎に来て私の話を聞いた後、『静思語』を整理して出版したように、台湾から海外まで、数多くの人がその短い一言を一生大事に使っています。書籍にしても写真にしても、私たちがそれを重んじさえすれば、それらは生き返り、一言で一生に影響を与えることができます。ですから、あなたたちが撮った写真や記録したもの全ては、とても貴重なものであり、大切にしなければいけません」。（慈済月刊六四五期より）

農作物と共に成長するコミュニティ

食べることは生きること

アメリカ・サンディエゴの「ナツメグ・ベーカリー」は、
地元の南カリフォルニア食材にこだわり続けている。
ソイラテと季節ごとのフルーツが挟まれたフレンチトースト等だ。
コミュニティで力を合わせて生産と消費の形態を全面的に改め、
住民に、より幸福な生活をもたらされた。



文・曾多間（雑誌「経典」専属ライター） 訳・有田夏子
撮影・劉子正（雑誌「経典」シニア・カメラマン）

「一年前、ニューヨーク・タイムズ・マガジン（The New York Times Magazine）の地域情報コラムでアメリカの農家と食の아트について連載を始めた時、私は食べ物と、それを作った人、そしてシェフたちにまつわる物語について書いていたつもりでした」。これはアメリカの作家、クリスティン・ムルケの言葉だ。だが彼女はいくつかの取材を続けるうちに気がついた。「私が書いて

いたのは食べ物にまつわる話というよりも、人々をとりまくコミュニティ——食品メーカー、消費者、そして美食家——にまつわる話だったのです」。

例えば、アメリカのウィスコンシン州マディソン郡に住むパン職人、ジェフ・フォードさんはこのように「ナツメグ・ペーカーリーのシェフであるホフォス（右から2人目）は、地元の食材を使ったレシピを作る。厨房とレストランの間にはガラス窓がある。子供が興味津々に窓に近づき、シェフが料理するところを見ている」。

言っている。「もし、このコミュニティの存在——つまり、私の顧客や仕入れ先、コミュニティの人々の存在がなければ、今日の私はありませんでした」。

また、マーケティング・サービス会社から農業へと転身したジョージア州のティム・ヤングさんは、「私が実践しようとしているのは、どうやって畑を耕すかではなく、コミュニティの形成方法なのです」と述べる。

そして、カリフォルニア州オークランドの食品業界コンサルタント、アンヤ・フェルナルドさんはこのように述べている。「最近少しずつ見直されている『独立自営農』という概念は、実はコミュニ

ティ再建の動きと深いかわりをもっています。使い古された言葉のように聞こえるかもしれませんが、これは本当です。コミュニティというものは昔から、いずれも農作物を中心に形成されてきたのですから」。

コミュニティ、コミュニティ、コミュニティ。彼らの言う「コミュニティ」とは、いったい何だろう？

食のつながりが コミュニティをつくる

昨年、ある五月晴れの日、私は南カルフォルニアの家族で経営している果樹

園、「ポリトー家庭農園 (Polito Family Farm)」を訪ねた。私は農場主ボブ・ポリトーさんの話を聞くうちに、彼ら農家がしばしば口にするコミュニティというものが一体何なのかを理解した。それは、食べものを分け合ったり、食への関心を共有したりすることで徐々に形成されていく人のネットワークなのである。このネットワークには、種を売る人や、見習いのパン職人、フアーマーズ・マーケットのマネジャー、果物を定期的に購入してくれる朝食屋の主人など、さまざまな人々が含まれている。

その他、たとえば毎日朝食を食べに来る学校教師が、ある日思い切ってパン職

人に声をかけ、学校でピザ生地の作り方を教えてくれないかと頼むこともあり得る。パンを買いに来る母親達の子供が、自然と遊び友達になることもある。小規模の農家から野菜と果物を定期購入しているジャーナリストが、ある日その農場の取材に訪れるかもしれない。これらは全て、食べ物をめぐって形成されていく人のネットワークだといえる。

もつと分かりやすく言えば、コミュニティは人々の会話を通して形成されるものだが、その会話は食べ物をめぐって人々の間に生まれるのだ。人は誰でも食べることが好きだし、食べることに興味を持って話すのも好きだ。今も昔も、好きな食



べ物やレストランについて話すことは、初対面の人々が打ち解けるためのいいきっかけになる。人々は食べ物をめぐって働き、生活し、気の合う友人を見つけると。ポリトーさんは、農業に従事して一番価値を感じているのは、人とつながるという喜びなのだと言っている。

ポリトーさんには長年、柑橘類の果物を注文してくれる大口の顧客がいる。ナツメグ・ベーカリー&カフェのオーナー

兼メインシェフであるドリユー・ホフォスさんだ。ホフォスさんは地元の南カルフォルニアの食材だけを使うことにこだわり続けている。「店には朝から晩まで私の料理を食べに来る人が訪れます。おいしいと褒めてくれる人もいれば、意見を言う人もいる。ソースが辛すぎるとか、ベジタリアンのメニューが少なすぎるとかね。つまり、私にとってこの店は、仕事であると同時に社交の場でもあるのですよ」。彼の日課は厨房に立って、地元の食材でペーストリーを焼き、五百人余りにブランチを準備するこ

●ポリトー家庭農園で柑橘類を収穫するスタッフたち（上の写真）。農園を経営して30年になるオーナーのポリトーさんにとって農業の仕事の一番の楽しみは、人々とのつながりが得られることだという（左の写真）。



とだ。厨房と食事スペースの間には大きなガラス窓があり、彼はパンを作りながら顧客を見ることが出来る。彼とパン職人がパン生地をこねているところを、子供たちがガラス越しに興味津々で見ていることもある。

ナツメグ・ベーカリーはガンソリンスランドの真向かいにあり、店には窓がひとつもない。この立地だけ見れば、朝食屋には向かない場所だということがわかるだろう。七年前にここで開業した頃、店で働いていたのは家族三人だけで、彼がランチを作り、妻がコーヒーを入れ、妻の母親がパンを焼いていた。店の間取

四年前、ナツメグ・ベーカリーにもう一つ大きなできごとがあった。ホフォス夫妻に第一子が生まれたのだ。同じ頃、店を三倍に拡張し、四脚しかなかったテーブルも今のように室内に十五脚、屋外に五脚に増やし、新たにカウンター席も設置した。「地元で採れた良質の食材を食べる」という理念がコミュニティに認められ、営業時間にはいつも長い行列ができるようになった。

「私たちは幸運でした。コミュニティの人々が『ナツメグ』の成功を望んでくれたおかげだと思っています」とホフォスさんは言う。

りは小さく、テーブルはわずかに四脚だけだった。彼は仕事の合間によくキッチンから顔を出すと、顧客と握手したり、彼らの意見を聞いたたり、来店してくれたことへの感謝の気持ちを伝えたりしていた。

「あの頃のお客さんが、今では我が家の友人になりました」と彼は言う。「初めてのお客さんは、朝食デートに来ていたカップルでした。彼らはその後結婚して、四年前に一人目の子供が生まれました。彼らは今でもよく店に来てくれます。子供は私のことをドリュージュさんと呼んでいるのですよ」。

食を通じたエンパワーメント

食のコミュニティにはさまざまな形がある。サンフランシスコの「フェリー・ビルディング・マーケット・プレイス」のように食農教育の大義を掲げているところもあれば、ニューヨーク市の「ブルックリン・フリー」のように特産品をきっかけとして観光名所に発展したところもある。

その他にも、都市の喧騒にかこまれた小さな緑地で、大きな社会的責任を果たしているコミュニティもある。たとえば、難民問題に取り組む「国際救援委員



「農業と食べ物は、ある種の媒介としての役割を持っています。子供たちは農作物を育てることで移住先の土地と繋がりができ、人々と食べ物を分け合うことで新たな人間関係を築くことができるのです」。私たちはロビーに案内され、この小さな農園を見学することになった。彼は菜園のなかでキャベツの種類の見分け方を熱心に語り、またこの農園が難民のコミュニティに果たしている重要な役割

● 難民問題に尽力するNGOである「国際救援委員会」は、新住民が多いアメリカとメキシコの国境付近で都市農園を営むことによって、子供たちに農業経営のスキルを学ぶ機会を与え、ともに、コミュニティに新鮮な食材を届けている。

会 (International Rescue Committee) が運営している「青年農園 (Youth Farm Works)」がよい例である。アメリカとメキシコの国境に近く、新住民が多数居住しているシティハイツ (City Heights) という地域では、国際救援委員会が難民の子供たちに空き地を提供し、新住民による移住地での農耕を支援している。

プロジェクトの責任者であるロビー・ウイルコックスさんはこのように言う。

● 地元の食材を提供する小さな商店は、大型チェーン店に追いやられている。だがデトロイトでは、食こそがコミュニティの共通点だとの考えから、今でも伝統市場で野菜や果物を購入し続ける住民が多い。

についても教えてくれた。「ここは、ただ野菜を育てるだけの場所ではありません。子供たちは自分たちで農園を管理したり野菜を販売したりしながら、社交、マーケティング、管理といった重要なスキルを学んでいます。このような経験は、履歴書にも書くことができるのです。ここでは高校を卒業した後に就職する子供たちが多いのですが、ここで経験したことは、彼らがよりよい就職先を得るためにも役立つています」。

現在、ここで農業に取り組んでいる難民の子供たちは六人いる。子供たちの出身地はコンゴ、ホンジュラス、メキシコ、モザンビーク、南スーダンとさまざまだ。

もよく畑仕事を手伝いました。本当は故郷が恋しくてたまらないけれど、ここで野菜を育てるのも好きです。野菜を育てていると、モザンビークの家を思い出すことができるからです」。

さらに多くの食のコミュニティが、より小さく、非公式な形で存在している。その多くは非商業的なものであり、人々の生活にとって欠かせない存在となっている。たとえば、公立学校でよく開催されるピクニックでは、保護者が子供たちと一緒に学校の庭で食事をしながら、子供たちの学校生活に触れることができます。また、多くの地域で催されるカウンティ・フェアでは、食べ物や飲み物がふ

彼らは毎週土曜日に屋台を出して、自分たちが育てた野菜を売っている。私たちがここを訪れた週末には、二人の黒人少女が屋台に立っていた。南スーダンから来たという十七歳の少女ルファイダは最近中国語を習っているといい、私たちを見かけると熱心に話しかけてきた。「私は大きくなったら国際人権弁護士になりたいと思っています。ここでは野菜を売りながら話術を磨いたり、コミュニティの人たちと知り合いになったりすることもできます」。

もう一人の少女、ビンビンヤタはこのように話した。「昔、私の家族がモザンビークでズッキーニを育てていた頃、私るまわれたり、羊や牛などの家畜美人コンテストが企画されたりするが、こうした活動のうちには百年の歴史を誇るものも多く、一家揃って出かける。また、在米華人の教会には「愛の宴」と呼ばれる独特の習慣があるが、その始まりは、かつて新しい土地に移住してきた同胞たちの親睦を深めるために、日曜日の礼拝のあと郷土料理を囲んで彼らの望郷の念に寄り添ったことだと言われている」。

このように、アメリカ社会のさまざまな場所で、食のコミュニティが生まれ、成長してきた。だが「地元で採れた季節のものを食べる」という考え方は長い間宣伝されてきたが、今でも主流には



●年に1度催されるカウンティ・フェアに地元の農家が参加し、子供たちが家畜の羊の美人コンテストに参加しているところ（右の写真）。サンディエゴのファーマーズ・マーケットで野菜と果物が売られているところ（上の写真）。コミュニティの親子が幼稚園のランチ・ピクニックに集まっているところ（下の写真）。



なっていない。統計によると、全米のファーマーズ・マーケットは一九九四年の千七百七十五カ所から二〇一四年の六千百三十二カ所へと成長しているが、ファーストフード業界の売上高は一九七〇年の六十億ドルから二〇一〇年の千七百億ドルへと成長している。ファーストフード産業の成長率は、地元の小規模農家のそれをはるかに上回っているのである。また、食コミュニティの形成において、職種は無視できない要因の一つとなっている。ホワイトカラーの知識階級であれば、地元の農家が育てた鶏を購入して自宅で料理するため一羽

二十五ドルの対価を支払うこともできるだろう。だがブルーカラーの労働者たちは、好むと好まざるとにかかわらず、ファーストフード店で一袋一ドルのチキンナゲットを買うことしかできないのである。食の工業化と貿易交渉のパラドックスにより、自然に栽培された野菜や果物の値段が化学薬品だらけのものよりも高くなり、地元の小規模農家が育てた野菜や果物は海外からの安い輸入品の波に勝てなくなった。「地元で採れた良いもの食べる」という当たり前だったことが、今や手の届かないぜいたくになったのである。

地元で採れた、季節のものを食べる

このような不条理を、ナツメグ・ベーカーリーのホフォスさんはいつも身近に感じてきた。「南カルフォルニアが干ばつに見舞われたあの年、私はヨーグルト・パフェの提供をやめざるをえませんでした。私は地元で採れたナッツと蜂蜜しか使わないと心に決めていましたが、あの年の干ばつで南カルフォルニア産のナッツと蜂蜜が恐ろしく高騰したのです。損失を抑えるためには値上げが不可欠でしたが、一杯十七ドルのヨーグルト・パフェなど、いったい誰が食べたいと思う

でしょうか？」。彼の話しでは、当時南カリフォルニア州の朝食屋は、どこも海外から輸入したナッツと蜂蜜を使うことでコストを抑えていたという。だが彼は「地元産の食材だけを提供する」という原則を曲げなくなかったため、やむなくこのメニューを中止した。理解を示してくれた客もいれば、わかってくれない客もいたと言う。「この店はどうしたことだ？他の店ではまだ売っているというのに！」と言われたこともあった。

彼はこのように考える。「私たちは、輸入食材に甘やかされたおかげで、お金のさえあれば何でも食べられると勘違いし



●デトロイト北端にあるコミュニティでは、加工食品しか買えない時代もあったが、ヘブロンは農場を作って隣人に新鮮な食材を提供した（右の写真）。キング・ストリートの住民が道端の土地で野菜と果物を育てているところ（左の写真）。



ているのではないのでしょうか。地元で採れた季節のものを食べるといふことの意味

味を考えなくなったのです。それは、地元の風土や気候で育てられた食べ物の美味しさをそのまま味わおうとすることであって、風土や気候のほうが自分の好みに合わせてくれるはずだと期待することではないのです」。

だがそれでも、自分自身で大地に作物を育て、厨房で料理を作りたいと切に願う人々は存在しつづけた。食のコミュニティが一つ、また一つと形成され、「地元で採れた季節のものを食べる」という考え方が、再び当たり前のこととして受け入れられるようになってきたのだ。私は素晴らしい物語を聞いたことがある。デトロイト近郊のノース・エンドという

地域は、かつて「食の砂漠」と呼ばれていた。市内に大型のスーパーマーケットが一つもなく、食品の九割がコンビニや酒屋、ベジタリアン・レストランで供給されているという状況だったからだ。だが「オークランド・アヴェニュー都市農園 (Oakland Ave Urban Farming)」は、放置されていた空き地を都市農園に変えることで、この「食の砂漠」に豊かな食のコミュニティを作りあげた。一度は荒れ果てた土地に、今では週末ごとに老若男女が集まって、ほうれん草やピーツを収穫したり、互いの話に花を咲かせたりしている。彼らはもともと隣人同士ののだが、デトロイトの財政が破綻して治安

が悪化してからは、互いの交流が希薄になっていった。食が、再び人々を結びつけたのである。

六月初旬の日曜日、私たちはオーケランド・アヴェニュー都市農園を見学することになった。古い街並みの中に、色鮮やかな菜園があらわれる。二列に並んだ細長い温室にはさまれて、黄色と青のペンキで彩られたカラフルな木造の小屋が立っていた。農園のボランティアたちの集会所として使われる建物であろう。

農場主のジェリー・ヘブロンさんと約束した面会の時間になったが、静かな畑にはまったく人影が見られず、ただミツバチの羽音がブンブンと鳴り響いてい

鮮やかなピンク色の服とスカートに身を包んだ中年の女性が現れた。「私がジェリーです。今日は教会に礼拝する日だったのでです」という彼女の言葉で、時間に遅れた理由とともに、その服装のわけについても知ることになった。

かつて不動産の仲介業をしていたというこの六十九歳の婦人は、オークランド・アヴェニュー都市農園の成り立ちについて語りはじめた。「私はこのコミュニティで生まれ育ちました。自動車工業が盛んだった時代、この街はとて賑やかだったのですよ……」。彼女の記憶によれば、およそ六十年前、このコミュニティには建物が密集しており、隣近所は

た。自転車で通りかかった人が私たちを見て、「ジェリーに会いにきたのですか？ 彼女は曲がり角の教会にいますよ。待っていてくださいね、私が彼女を呼んできますから」と親切に話しかけてきた。

私が驚いて「ジェリーとお知り合いなのですか？ ありがたい偶然です」と言うと、彼は笑いながら答えた。「このコミュニティで、彼女を知らない者はいませんよ。ここで待っていて下さい。すぐに戻りますから」。

そのようなことがあったので、まだジェリー本人と出会う前から、彼女がコミュニティに与えている影響の大きさがよくわかったのである。ほどなくして、

互いの声が聞こえるほど近かったという。近所の子供たちは窓越しに声を掛け合い、連れ立って学校へ通った。

彼女は成人すると仕事のため地元を離れて都会へ出た。そして十四年前に退職して故郷へ戻ると、そのあまりの変化に驚いた。「建物が取り壊され、広い空き地には人の背丈ほどもある雑草が伸び、危険な状態になっていました」。デトロイト市政府の財政が破綻した後、多くの人々がこの地を離れたため、放置されたり差し押さえられたりする建物が増えた。麻薬業者や犯罪者がこれらの空き家に隠れ住むようになると、コミュニティの治安は崩壊し、隣人は互いに警戒する



ようになったという。

「スーパーマーケットも撤退し、近所の人たちは食材を買う場所すらなく、人々はファーストフードばかり食べて、とても不健康でした」。当時、このコミュニティの土地は一坪五ドルまで値下がりしたにもかかわらず、買い手もつかない状況だったという。彼女は百坪の空き地を購入して菜園を二畝つくり、野菜を育てはじめた。収穫した野菜は近所の人々に配った。そして彼らに農業の楽しさを説いて回り、一緒に農作をしようと誘いかけた。

この二畝の菜園はしだいに、人々が週末に集まる場所になっていった。コミュニ



●トールは農業を愛しており、高校卒業後にサンディエゴ初の都市農園を作った(写真上)。週末には農園でさまざまな農芸教室を開き、コミュニティの人々に参加を促している(写真下)。

ニテイの人々がここでイベントを催したり、小学校の教師が子供たちを連れて見学に来たりすることもあった。それから十一年が経った今、二畝だった菜園は、街の区画を二・五ブロックほどまたぐ大きさになり、金曜日にはファーマーズ・マーケットも開かれるようになった。だが彼女にはもっと大きな夢があるという。「私はここでフルタイムの農業スタッフを雇って、新たな就業の機会を生み出したいと考えています。そして、自

分の生まれ育ったコミュニティを再建するのです！」。

コミュニティの飲食革命

およそ三千六百キロ離れた南ロサンゼルスにも、都市のジャングルで農耕をはじめた、革命的な精神の持ち主がいた。彼こそはTEDスピーチで一躍有名になったロン・フィンリーさん、その人である。

「私が我慢ならないのは、私たちのすべてが現代経済に支配されているということです。最も基本的な、食べることから始めましょうか」と言って、彼は話し

始めた。「あなたは自分の口に入れるものが、どこから来ているか知っていますか？あなたの食べているそのトマトは、どんな化学肥料を使っているのでしょうか？」。

十年前、彼は自宅の前の歩道で野菜を育てはじめた。歩道は私有地ではないという理由で逮捕されたこともあるが、フィンリーは罪を認めなかった。「私がどんな罪を犯したというのでしょうか？私はただ、自分が食べるものは自分で管理したいと望んだだけです」。彼はTEDスピーチでこのようにも訴えた。「私が住んでいるのはドライブ・バイ（走行中の車での銃撃等の犯罪）とドライブ・

スルーの街として知られる、あのサウス・

ロサンゼルスです。でも、皆さんは知っていますか？ ドライブ・スルーが原因で死ぬ人々のほうがドライブ・バイで殺される人々よりもずっと多いのです」。

フィンリーさんの歩道には、今ではザクロやバナナがたわわに実っている。彼はヤシの実を収穫している近所の子供たちを見ながら冗談を言った。「知っているかい？果物というのは、スーパーマーケットの棚から生えてくるわけじゃないんだよ」。

新鮮な野菜をもらっても料理ができない人もいるため、都市農園の主催者のなかには料理教室を開いている人もおり、

大変興味深い。

たとえば、サンディエゴのシティ・ファーマーズ・ナーセリー (City Farmers Nursery) では毎週末に料理や園芸などのさまざまな教室が開かれている。ここは、サンディエゴでもっとも古い農園だ。創業者でありオーナーでもあるビル・トール (Bill Tall) さんは農業を愛しており、一九七二年に高校を卒業すると、すぐにこの小さな農園を開いた。この四十七年間、都市農業にはさまざまな課題がふりかかったが、彼の粘り強さと熱心さ、そしておそらく幸運にも助けられて、この小さな農園はずっとここに存在し続けた。この農園は、今ではサンディ

エゴの農業青年クラブが憧れる聖地であるという。

私たちもその評判を聞き、この聖地を訪れることにした。その日、彼は自宅のリビングにいた。彼は野外調理を得意とする友人を講師として招き、十数人の仲間たちを生徒として、太陽熱クッキングの授業を開いているところであった。平屋は農園のすぐ後ろに建っている。玄関の前にはピザが焼ける土窯が、室内には明るくて広いオープンキッチンがある。色とりどりのインテリアは、田舎の農家の風情を感じさせた。

教室には老若男女が集い、なかには子

供連れ参加者もいた。彼らは講師の指導を受けながら、厚紙をかまど状に重ねあわせ、そこに日光を集めるためのアルミ箔を貼り付けていた。

「南カリフォルニアの太陽の光はこんなにも強力なので、ここに住んでいるのなら利用しない手はありません。電気も、ガスも、木材も使わず食材が食べられる状態になるのです。環境に良いだけでなく風味も格別なのですよ！」と講師が言

●ロサンゼルス南部に住むフィンリー(写真右)は、コミュニティで新鮮な食材が買えないことに気づくと、自分で歩道に新鮮な野菜と果物を育てて隣人に無償で提供した。その理念は人々に受け入れられ、彼のTEDスピーチは人気を博した。



うと、彼も「メキシコのチリスープは、太陽熱で煮込むのが一番ですよ」と口添えした。

自らこの地に腰を据えて作物を育て、自分も厨房で料理することは、不思議な安心感をもたらす。

「食物を育てる人、調理する人、そして食べる人。その間に生じる信頼関係こそが、食のコミュニティの真髄なのです」とポリトーさんは言う。「かつて私の両親からオレンジを購入していた人々が今でも私のお客さんになってくれているのは、そういうことです」。

取材の中で何度も聞いたことがある。アメリカで有機農業の認証を得るために

は複雑な手続きが必要で、家族単位で営まれる小規模農業者にとっては負担が大きすぎるのである。

彼の発言もそのような現実を浮き彫りにしている。「この農園では、両親の代からずっと有機栽培で果樹を育ててきました。約十年前、有機農業がある種のブームになった時、多くの大規模農家が栽培方法を変えて認証を取得しました。それ自体は良い変化だと思っています。ただ、私たちのような小資本の果樹園には、認証を取得するための人手も財力もないのです」。

彼の得意先の多くは健康や有機野菜を経営方針としているレストランや市場

であるが、認証を得ていないからといって、ポリトーさんを見捨てたりはしなかった。ナツメグ・ベーカリーのホフォス、そしてリトル・イタリアンのマルカー

ト農家市場 (Marcato とはイタリア語で市場を意味する) の担当者は口をそろえて言う。「私たちはボブを信用しています。彼の作るオレンジは最高ですよ！」

ポリトー農園の水利を任されているサントスさんもこのように言っている。

「私はボブが好きなのです。彼の両親の代からここで働いていましたし、今は彼のもとで働いています。私は永遠にここで仕事ができばいいと思っています」。サントスさんの妻もここでジュース絞り

の仕事をしており、四人の子供たちは近くの学校に通っている。「私はこの谷で働く人々を、一人残らずよく知っているのです」。

午後四時、一日かけてオレンジを収穫していたスタッフたちが退勤する。彼らは収穫したオレンジを袋に詰め、持ち帰って家族と共に食べる。夕日で長く伸びた影が、彼らと共にゆっくり移動する。彼らは駐車場への道を歩きながら、趣味のスポーツのこと、家族のこと、そして学校の子供たちのことを語り合っている。これこそが父親から受け継いだ農場——コミュニティの姿なのである。

(経典雑誌二五八期より)

□地球にやさしい思考

健康食

物を食べる目的は体に栄養を与えて命を維持することにある。

菜食は野菜と果物が多いので

繊維が多く栄養豊富で消化を促す。

また、頭脳がはつきりして

心身ともに健康になる。

(『地球と共に生きていく』より)



(写真提供・黄筱哲)

九月の出来事

.....

訳・済運

09・01	慈済基金会は、国家災害防止救済科技センターと共同で1日から4日まで「国際青年防災・救済研修会」を催した。講座は新店静思堂と国家災害防止救済科技センターで、実地訓練は苗栗慈済志業パークで行われ、21の国と地域から83人が参加した。
09・03	中国南京、上海、江蘇省昆山、常州及び蘇州からの慈済ボランティアが阜南ボランティア協会など多数の志願者団体と共に、3日から6日まで安徽省阜南県王家壩鎮團結村、互助村、崔集村で、合計5千世帯余りの洪水被災者に米と食用油などの生活物資を配付した。
09・04	慈済基金会は、ボツワナ、マラウエイ、ナミビア、スワジランド、ザンビアなど5カ国の現地の慈済ボランティアに、それぞれ5千枚

09・13	09・12	
<p>慈済骨髄幹細胞センターは、13日から28日まで全国各地で24回にわたる「世界骨髄寄贈者デー」活動を行った。お茶会や音楽会、骨髄ドナー登録会を通して、より多くの大衆に寄贈を呼びかけると共に、世界中の志願寄贈者に敬意を払った。</p>	<p>慈済基金会は、2020年7月吉祥月（旧暦の七月）シリーズの活動の一環として、「優人神太鼓」を招いて「金剛心」感恩祈福公演会を2回催した。8月29日の花蓮静思堂の後、9月12日には高雄静思堂で行われた。</p>	<p>実践」と題した学術討論会を共催した。17の学校から34名の学者が参加し、孫学や慈済学、NGO、大学の社会的責任などの議題を含む論文が発表された。</p>

09・11	09・10	
<p>慈済科技大学は教育部の大学・専門学校・大学院高等教育推進プロジェクトに呼応して、国父記念館で「世の為に尽くし、大愛思想を</p>	<p>慈済大学模擬医学センターで10日から14日まで模擬手術による研修会が行われた。18名の医学生と49名の慈済病院の医師が8人の「無言の良師」の体を使って13項目について学んだ。</p>	<p>の感染予防のための使い捨てマスクを送った。4日に慈済南アフリカ支部が代表で受け取り、それを各国に輸送した。その他、イラクでの新型コロナウイルスの感染予防のために、5万枚の使い捨てマスクと2160個の防護マスク、2百個の防護ゴーグル及び25個の額体温計を寄贈し、現地の「世界の医療団(MDM)」によって1回目の物資が8日に届けられた。</p>

09・23		09・18	<p>慈済基金会は18日から20日まで、中国広東省深圳市が開催した「第8回中国公益慈善プロジェクト交流展示会」に参加し、「貧困のない新文明を創設する決意」、「村興しをする決意にも智慧が要る」、「心身共に健康な家庭」、「豊かな自然には環境保全が重要」という4つのテーマで出品し、「慈済健康物語の家」で銀賞を獲得した。</p>
09・19			<p>慈済インドネシア支部は感染予防物資として、慈済大学から新型コロナウイルスの抗体検出試薬を購入した。1回目の3万回分が本日、空路で送られた。</p>
09・23			<p>慈済基金会は「2018〜2019年永續報告書」で台湾SGS（検査業務を行う会社）の第2回企業社会責任賞（CSR Awards）のエリート賞を獲得し、顔博文執行長が慈済を代表して賞を受け取った。</p>

09・17		09・14	<p>慈済アメリカ総支部とノースカリフォルニア、テキサス州ダラス支部のメンバーは、現地時間の14日夜（日本時間15日午前）にビデオ回線を通して證嚴法師にカリフォルニアの森林火災とメキシコ湾のハリケーンローラ被害と慈済の対応措置、会員への慰問などについて報告した。法師は、皆が安全に注意し、人間（じんかん）菩薩を更に募り、心を繋いでアメリカ全土を愛で満たすよう促した。</p>
09・16			<p>慈済基金会は内政部2019年度災害防止救済推進第3期プロジェクトにおける優秀企業賞獲得の栄誉に輝き、慈済発展所職員の呂学正が代表して受け取った。</p>
09・17			<p>花蓮慈済病院と財団法人生物技術開発センターは「精度の高い医療及び細胞治療に関する協力覚書」を交わした。</p>

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2020年10月16日発行・286号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



平和と愛のために、共に行動しよう

南米のエクアドルは新型コロナウイルスの感染が深刻で、夜間の外出禁止令を延長した。また、近年にない大きな景気の後退に直面し、低所得者層は食糧難に直面している。慈済ボランティアは消防署、教会などと協力して食料パックを配付した。米と乾麺、トウモロコシ粉など8種類の食品が入っており、既に5千世帯余りに贈った。ボランティアはその時手書きのポスターを作った。オリーブの枝を啣えている三羽のハトの図柄は平和を象徴し、「慈済の愛」、「共に行動すれば、世の中はもっとよくなる」、「生命を助けるために肉食を減らそう」という文字を添え、配付の時に「衆生を愛護してこそ希望は生まれる」と呼びかけた。(文・ジェニファー・ルイズ 写真提供・エグダマクラス 2020. 6. 18 エクアドル・サンタアナにて撮影)



慈済日本サイト



慈済ものがたり